

二三年まえの雑誌に、詩人の三好達治みよし たつじさんと加藤周一かとうしゅういちさんが、日本語では近代的な詩は書けないという主意の論文を書いていました。

二つともよく書かれた論文で、論理も周到精密で、なかなかの説得力を持つていました。だから私もほとんど説得されてしまつて、なるほどそうかもしれないなと思ひました。そして、

「だが、詩の書けない国語で、いつたい、小説や戯曲が書けるだろうか？」と考えたりしました。すると、日本語というのは、ぜんたい、なんだろう？ よくよくダメな国語らしい。……といったような、日本語についての絶望にちかい感想にまで私は追いこまれました。そして、終戦のつぎの年ごろ志賀直哉しが なおやさんが「いつそフランス語を日本の国語にしてしまつたらどうか。」と言われたことを思い出しました。

これは、これらの人たちを、私が相当信頼しているためでありませんが、同時に、日本語の取りあつかいかたについて、私自身がつねに手こずっているため、これらの人たちのそのような意見の出てきた理由が人ごとならずわかるからです。しかしそれがそうであればあるほど、ことは重大です。

私は日本に生まれついて、日本語を自分の血肉にしてしまつてゐる。いまさら返上しようと思つたとしても返上しようがない。あわてざるをえない。かつ悲観せざるをえない。まるで泣きべそをかいたような気分になつた。

——というのは、じつは嘘であります。

いや、たしかに十分間ばかり悲観的に考えこんでしまつたのは事実だが、そのあと、大笑いにしてしまつてしまつたのです。これらの詩人や詩人らしい人たちは、何を言うやら！日本人はこの日本語でもつて話し、書き、歌い、考えて数千年も生きてきている。それでどうして詩がつくれないことがあるのか。事実つくつてきている。しかもよい詩を無数につくつてきている。

人びとがともに生き、そして生きる手だてとして言葉を使つているところならば詩は自然に生まれうるし、生まれています。そこが詩の地盤です。それ以外に地盤はないし、ありうる道理がない。三好達治さんや加藤周一さんは、どこに詩の地盤を見つけたさうとしてゐるのだろうか？

もしかすると、ヴォキヤブラリだけを人間の生活から切りはなして——実際において切りはなしうるか、えないかがまた疑問だが——そのヴォキヤブラリの無数の組みあわせが、詩の地盤だと思つてゐるのではあるまいか？

だから、彼らの日本語絶望論は、たとえばヴァレリーの詩を日本語に翻訳すると、ひじょうにわかりにくいものになつたり、原詩とは異なつた感じのものになつたりすることなどから発想されたものではないだろうか。

いらだつた結果なら、多少わかります。なぜならば、だれが時に自分の国語やヴォキヤブラリにいらだたないだろう？ 詩人から政治家にいたるまで皆、いらだちます。しかも、どこの国

のどんな国語の中でもいらだつのです。現にヴァレリイがフランス語にしじゅういらだつています。むしろ、そのいらだちの結果の聖なるものが彼の詩であるとさえ言えよう。三好や加藤は、ヴェルレーヌやマラルメが、はきなれた靴をはくように、無抵抗にフランス語をならべて詩を書いたのだと思つてゐるのだろうか？

なるほど日本語は、フランス語や英語にくらべると、なりたちかたが複雑だし、とくに、言葉そのものが近代ヨーロッパ的な鍛錬や整理を、まだあまり強くは受けていないから、現在のわれわれ——中途はんぱな形で近代ヨーロッパふうの教養みたいなものを呑みこんで、消化不良を起している段階にある日本知識人にとつては、現在の日本語が、かなり不自由な道具になつてきていることは事実です。

しかし、それならば、なるべく早く自由な道具につくりかえていけばよいのです。またつくりかえることができます。その努力をするまえに、不自由さにいらだつたあまり、道具を叩きこわしたり、叩きこわすまねをしたり、叩きこわすと言つてみたり、ペダンティックな愛想づかしを並べてみたりするのは、みんな愚劣でキザです。

もしかすると、そのような人たちは、詩人として衰弱し涸渇したのではないのでしょうか？そして自身の衰弱や涸渇の原因を、日本語そのもののほうへかざけているのではあるまいか？つまり調子を取りはずして絵の描けなくなつた画家が、筆やキャンバスや絵具にケチをつけて、こんな材料では絵は描けないと言いはじめたようなものではないだろうか？

ところが、指のさきにドロ絵具をつけて板つぺらにだつて絵は描けます。しかも、どんなよい絵でも描けます。いうまでもなく材料は良質であるにこしたことはありません。しかし材料の質

の劣悪さを言うことで、作家としての燃焼の不足をおおうようなことはおかしい。それゆえ、私は大笑いしました。

そして、そのつぎに、私は腹がたつてきました。

なぜならば、日本語は、われわれにとつて、かけがえのない貴重な国語であるばかりでなく、ひじょうにすぐれた、ゆたかな国語だと私は思っているからです。まえに書いた種々の弱点を持つているにもかかわらず、また、そのために私などつねにひどい抵抗を感じて困ったり、いらだつたり、とくに現在の日本語の混乱にたいしては、ときに絶望に似たものを感じながら、しかも日本語はよい国語だと思つています。

理由を多くあげる必要はない。万葉集一卷でたります。その言葉で万葉集をつくりだすことのできる国語はよい国語です。万葉は、あれは長歌または短歌だからというものがあるかもしれない。それはそうです。しかし長歌も短歌もともに、何よりもさきに詩です。型のことは第二番めに考えればよいことです。その他、例はいくらでもあります。近代にも、あげよとあらば、その例にこと欠きません。おもしろいことに、「フランス語を国語にしたら。」などと言つたりした志賀直哉の小説の中のすぐれたものなどが、じつは日本語の優秀性の証拠の一つであるのです。その他、日本語の国語としての優秀さならば、私のような無学なものでも、いくらでも実例をあげて証明することができます。

私がこのようなことを言いだしたホントの目的は、とくに三好達治や加藤周一の議論そのものにケチをつけようがためではありません。現代日本の専門的詩人たちが、ほとんど、いちように衰弱しているように私にみえ、そして、その衰弱の一例として三好と加藤の姿や考えかたが、か

なり代表的なものであり、かつ、全体の衰弱の症状の一つをシンボライズしていることがらのように私に見えたからにすぎません。

詩が好きで、詩集も雑誌類にのつた詩も、かなり読むが、どれもこれもないが衰弱しています。衰弱はまず、単純さと明確さの喪失に現われています。

理由のない複雑さと晦渋さに満ちた詩が多すぎます。読んでわからないだけではない。つくつた当人もわからないで書いているとしか思えない詩があります。わからないのだから、興味も持てません。もちろん、それらが、それらの詩人自身の必然としてのシンボリズムやミステイシズムやシュールレアリズムならば、それで結構だし、それはそれとして理解もできれば興味も持てるのだが、現代の詩の複雑さや晦渋さは、そのようなものではないようです。——と、ここまで書いてきて、さて困りました。このへんで、そのような詩の実例を引用してこないと話が具体的になりません。しかし引用すると、作者の詩人にたいし個人的な迷惑をあたえることになります。しかたがないから引用はしません。ただ、無責任な放言はしていません。そのへんにある詩集なり雑誌にのつている詩を五つ六つ読んでみなさい。私の言っていることがすぐにわかつてもらえると思います。私の見るところによると、多少とも名のおつた専門的詩人で、現在十分なつとくのできる仕事らしい仕事をしている人は、ほとんどいません。まして十年まえに自分の立つていたところから前に進んだ場所で仕事をしている人は一人もいないと言つてもよさそうです。

詩は、その本質からいっても、文学史上の事実からいっても、つねにその時代々の文学の最前線に立つて進むものです。それがしかし現在は、いちばんのビリから、氣息エンエンとして

歩いているようにしか見えない。

たとえば、第一次世界大戦の直後には表現主義やダダイズムの詩がさかんに生まれ、それがその国々の文学の前衛の役をつとめた。日本でもある程度までそうであつた。第二次大戦直後の現在に、それに相応するものが現われていません。詩人たち、または詩を生みださうする若い世代の人たちは、気ぬけしたようになるか、または詩よりは別の場所に自分たちの表現を求めているらしく見えます。

もちろん、第一次大戦と第二次大戦とは、同じく世界戦争といひながら、その質において、その歴史的意義において、それらの人びとにあたえた効果において、ひじょうにちがうのだから、その結果として生まれてきた文化的産物もちがうのは当然で、第一次大戦直後に生まれたものと同じもの、または相当するものが第二次大戦直後に生まれなからといつて、よいの悪いのと言へることではなく、それはそれで別の角度から見て解釈されなければならぬ現象でしょう。

しかし、いずれにしても、これだけの激動の直後です。何かの形でか、詩は、その激動を反映したり、はんすう反芻したり、動転したり、錯乱したりするのが自然だし、当然です。すくなくとも、第二次大戦をくぐりぬけてきた痕跡をとどめていなければならぬはずです。それがほとんどないのです。大戦は詩人たちから忘れられてしまったか、または、故意にふれられないですぎているようです。わずかに高村光太郎たかむらこうたろうなど数人のヴェテランたちが、少しばかりおかしな形で、それを正面に持ちだしたり、反芻しているだけです。

詩人よりも、かえつて小説家や戯曲作家や評論家などのほうが、それをしていきます。一人ひとりの詩人のばあいでも、詩の中でよりも小説や評論の中でそれをしていきます。

たとえば草野心平くさのしんぺいの小説は、彼の詩よりもよいか悪いかは別として、詩よりも「戦後」です。

三好達治のエッセイが、やつぱり彼の詩よりも「戦後」です。その他、そういう例が多い。しかも、逆に、ごく少数ではあるが、高見順たかみじゆんなどのように、小説家が詩を書きだし、そこに「戦後」がチャンと具体化されていたりしています。これは、なんとしても、おかしな話ではないでしょうか。詩はいまや詩人にとつて余技または第二芸術になつてしまつたのでしょうか？

詩だけを書いていたのでは食えない、しかも食えない度あいが十年まえの何倍にもなつてしまつたから、という理由も考えられないことはありません。しかし、そのことはまた別の考察の題目であり、よしんばそれがそうであつたとしても、起きている現象を十分に説明しうる理由にはなりにくいと思います。

第二芸術で思いましたが、ご承知の、三四年まえ、一二の批評家が短歌や俳句を芸術として第一義的なものでないとやかましく言いたてたが——そしてその論旨はある程度まであたつていたが、いちばん大事な個所で大きな見おとしをしていました。短歌や俳句が、何よりもさきに詩であるということです。特定な定型を持つてはいても、それらは詩なのです。

論者はそれを見おとしして、視線を主として短歌や俳句の伝統の中の保守性だとか、人間生活や人間精神との相関のしかたの趣味性だとかにそそいで、それらを否定するのにヤツキとなつた。詩としてあつたうえでの本質的な追求をおろそかにした。または、そのようにおろそかな態度から短歌や俳句が眺められた議論であつた。

そのために、議論としてチョットおもしろい議論にはなつたが、結局はこつけない一人相撲に終つてしまつたのです。

そしていま私が見るのに、短歌や俳句が第二芸術か第三芸術か知らないけれど、現状のままでも、ふつう言われる詩人たちよりも、歌人や俳人のほうが、まだしも、其の詩を打ちだしている事実があることです。とくに俳人の中には、創作の態度の点でも実作のうえでも、現在の多くの詩人たちよりも前に進んで仕事をしている人が、かなりいます。つまり、この比較の中では、歌人や俳人のほうが第一芸術家で、詩人のほうが第二芸術家なのです。たいへん皮肉です。

これを要するに、詩および詩人は衰弱しています。小説も戯曲も評論も衰弱していないことはないが、詩がいちばんひどいようです。そこには、発見も、開眼も、歌も、毒悪も、刺激も、極度に不足してしまいました。おもしろくない。

詩集を読んでも、雑誌にのっている詩を読んでも、自分の目の中からウロコがとれていくようなものに、ぶつからないのです。ところが、シロウト詩人の詩にこんなのがあります。

夜

父と

兄が

山からかえつてきて

どしつと

いろりにふごんで

わらじをときはじめると

夜です。

これは山形県の山奥の中学二年の、平凡な一少女がつくつたものです。この美しさと強さに匹敵しうる詩が、現在の詩人たちの作品の中に一つでもあるでしょうか？ 私には見つかりません。

人びとの中から自然に生まれてきた優れた詩の例は、現在、ほかにも多い。それらを引用したが、すでに時間がなくなりました。「夜」一編だけでも足りると言えなくはない。この詩の美しさと強さのまえでも、三好達治さんや加藤周一さんは、日本語では詩は書けない、と言えるでしょうか？ また、その他の専門的詩人たちは、この詩のまえでも、ご自分たちのペダントリイやミステイシズムや晦渋遊戯をふりかえつてみることはできないのでしようか？

詩と詩人が衰弱から立ちなおるためには、もういちど、もつとも素朴な地盤——自我の生命、生活、そしてその自我を取りまいて生き、ひしめいている人びとの生命と生活の場所に、もういちど自分の足で立つてみる以外にないのではないでしようか。

底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954 (昭和29) 年4月25日初版発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年5月25日